

「すみませんでした、せんせい」

反省した一郎にうなずき、十蔵は腰をかがめた。

拾い上げたのは二本の傘。城下町まで買物を出かけた奈緒に付き添い、姉弟そろって外出した清香と一郎を追ってきたのは、降り出した雨にぬれないように傘を届けるためだったのだ。

「とんだ災難でござったな、清香どの」

「あ、ありがとうございます」

ひろげてもらった傘を受け取り、清香は顔をあからめる。清香を無理やり連れていこうとした男たちは十蔵に叩きのめされ、ぬかるむ路上でだらしなく気を失っていた。

「風邪をひかせては気の毒だな」

十蔵はつぶやきながら、一人ずつ肩をつかんで起こしてやる。活を入れ、息を吹き返させるためだった。

「ううっ……」

「ふ、不覚」

「お、おれたちとしたことが……」

目を覚ました男たちは脇目もふらずに逃げていく。昼間から飲んでいた酒の酔いはさめ、再び十蔵に刀を向けるどころか、顔を見ることもできなかつた。

「お屋敷に戻りましょう」

退散したのを見届けると、十蔵は先に立って歩き出す。

「せんせいっ」

一郎が呼びかけても、歩みを止めようとはしなかつた。

十蔵が控えめなのはいつものことだが、今日はどこか様子がおかしい。悪いのは相手の男たちなのに、まるで自分がいけないことをしたかのようだった。

「一郎ちゃん、待って！」

後を追った一郎に続いて、奈緒も駆け出す。

「お待ちくださいまし、おじょうさま」

あわてる清香の前に、何者かが立ちほだかつた。

「清香どの、ご無事でしたか」

「か、加納の若さま……」

行く手をふさいだのは、逃げた三人とは別の若い男。

十蔵と同じぐらい背が高く、着ていたのは高価な絹の羽織と袴。手にした傘もしゃれている。防具と共にかついだけいこ着は汗にぐっしりぬれており、朝げいこを終えて帰宅するところであるらしい。

「騒ぎを聞いて駆けつけたのですが、ひと足遅かつたようですな。お助けできずに残念でした」

清香に向かって微笑みかける、男の名前は加納兵馬。藩の家老の跡取り息子で二十二歳。武芸も学問も勝てる者はいないと評判な上に美形であり、城下の娘たちの胸をときめかせてやまない青年だった。

しかし、清香の反応はそつけない。

「失礼いたします」